

「平成最後」の桜に



静岡の今

事異動など社会生活では区切りの行事が多いが、それが「平成最後」と思うとなぜか感慨深い。

「令和」という新元号が4月1日に発表されると、身の回りでにわかに「平成最後の〇〇」という表現が氾濫してきた。普段でも3月から4月にかけては年度替わりで、卒業式や入学式、定年退職や入社式、人

事異動など社会生活では区切りの行事が多いが、それが「平成最後」と思うとなぜか感慨深い。

「平成最後の」全国的なイベントは、統一地方選挙だろう。4月7日に前半戦が終わったが、静岡では二つの政令指定都市の市長選が行われた。静岡、浜松市とも現職市長が当選したが、浜松市では同時に行わ

れた行政区再編の賛否を問う住民投票で、再編に反対する票が市提案の3区案に賛成する票を上回った。同市議選でも再編に慎重な自民党系勢力が過半数を占めそうな見通しで、再編を進める鈴木康友市長は厳しい行政運営を迫られることになった。県都の静岡市も、政令指定都市で初めて70万人を切った人口減少問題や行政の進め方をめぐって川勝平太知事との確執があり、田辺信宏市長の政治手腕が一段と問われることになった。

「令和」に向けてそれぞれに多難の船出となった静岡、浜松市だが、両市にキャンパスがある静岡大学と浜松医大の再編計画は3月29日、合意した。2021年度をめどに、静岡、浜松両市に新大学を再編する計画だ。

浜松医大との再編に踏み切った静岡大学では3月23日、静岡市駿河区のグラウンシップで卒業式。626人の女子大生が社会に巣立ったが、ほとんどが着物姿で「平成最後の」卒業式に彩りを添えた。

4月5日は二十四節気の「清明」。すべての生命が生き生きと輝く季節になったが「平成最後の」サクラは散り始めた。時代替わりと重なった今年のサクラを感慨深く眺めた人も多い。散るサクラに代わって瑞々しい若葉が「令和の時代」を告げようとしている。



平成最後の卒業式風景＝静岡市駿河区、全日写連・吉川正宏さん撮影

(前静岡県監査委員 富永久雄)